

第9章 京の内

沖縄の主なグスク（城）には城内に聖域や拝所があり、そこでは各種の儀礼などが行われていた。首里城も同様に聖域や拝所を持ち、その中でも城の南西側に位置する「京の内」は巨大な聖域となっていて、いくつかの御嶽が点在していた。京の内は首里城発祥の地との説があり、歴史的空間の構成上、最も重要な場所と評価されている。しかし、京の内の歴史性や空間構成などについての究明はまだ不十分であり、各方面からの学術的な調査・研究が必要とされている。

今後の京の内の整備計画に役立てるため、学識経験者からなる検討会を設置し、資料や情報を収集・分析して様々な視点から検討を行った結果、京の内の空間構成等を把握するためには、さらに資料の発掘や発掘調査結果を踏まえた分析が必要であることを再認識した。

本章では、検討会の中で使用されたイメージ模型（検討会での承認対象外）の作成の過程を記述することとする。

1. 京の内の語義・語源

京の内の語意については、王城の聖域のことで広義には首里城をさし、狭義には首里城南西の石積で囲まれた空間であるとされ、また“きや”という語は京都のことで、これに擬して首里城のことも京と呼ぶとの解釈があったが、今回の検討会では以下のような検討がなされた。

- ・『おもろさうし¹⁾』では“けおのうち”の表現が多く、これは“せじ”といわれる語と同じく“靈力”の意味を持つ。
- ・『おもろさうし』では“うち”は“せじある聖域”という意味であり、“けおのうち”がいきなり京になったのではなく、せじある聖域という意味の固有名詞と考える。

2. 京の内の空間構成

京の内の空間構成については不明な点が多く、図化する事は難しいが、今後の検討に資することを目的としてイメージ模型を作成をした。

1) 基礎資料

空間を示す基礎的な資料として以下の図面、絵図を中心として検討した。

- ・「旧首里城図」（昭和6年頃作成）資料編231ページ
- ・「旧首里城殿舎復原配置図」（『琉球建築』に所載）資料編232ページ
- ・「旧首里古地図」（1700年琉球王府作成、1854年再調整）資料編228ページ
- ・「首里城古絵図」（首里古地図と同時期と思われる）資料編230ページ

2) 京の内の範囲

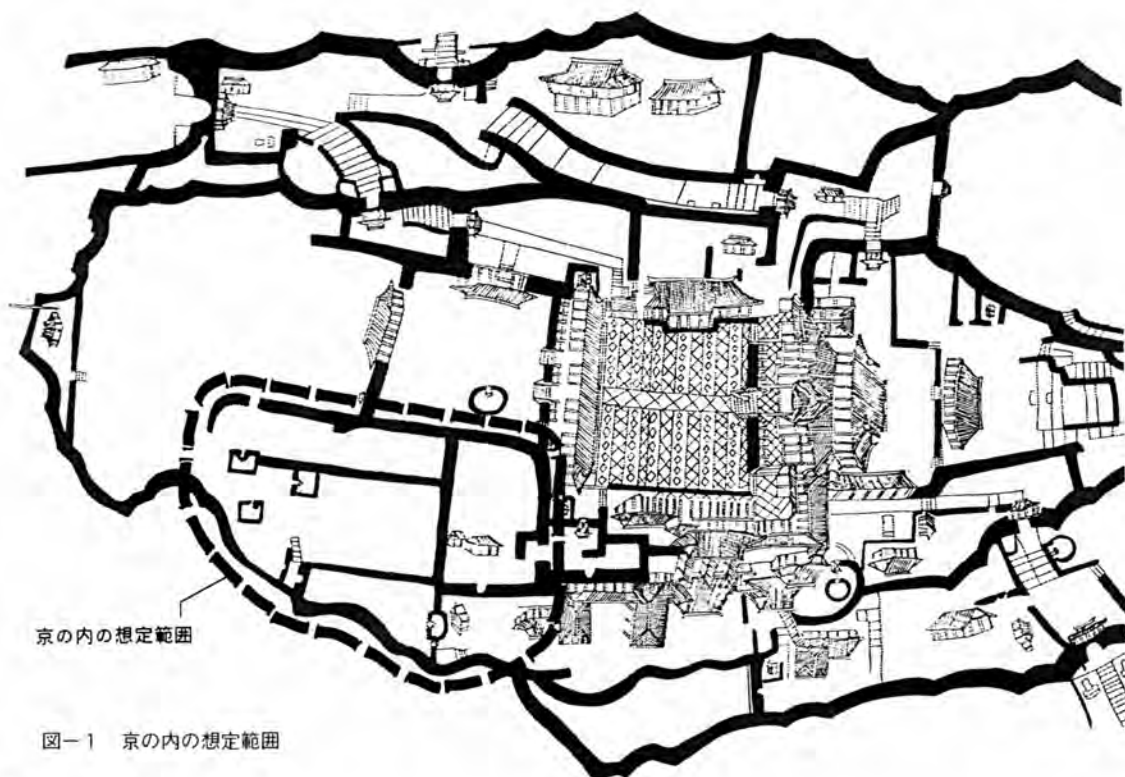
京の内には、前述したように広義、狭義の意味があること、グスク時代（12世紀前後～15世紀前半）の首里城がどのような範囲のグスクであったのか不明であること、城における京の内の範囲を示す古文書や古絵図、平面図がないことから現時点では一概にどの場所であるとは言えない。

ここでは古地図、古絵図に描かれた次ページ図-1に示した範囲を京の内と想定して検討を進めた。

3) 地形

「旧首里城図」を基本として地形を起こした。

1) 首里王府が沖縄・奄美に伝わる古歌謡を採録し、冊としてまとめたもので、全部で22巻ある。



京の内の想定範囲

図-1 京の内の想定範囲

4) 石積

(1)構成

「旧首里城図」、「旧首里城殿舎復元配置図」の石積をベースとし、不明な部分については「首里古地図」、「首里城古絵図」を参考にした。

下之御庭との境界石積の位置については「旧首里城図」を参考にしたが、長さについては「首里城古絵図」に示された寸法を採用した。

番所、鎖之間との境界石積は、「旧首里城図」と「首里古地図」を基本とした。

(2)高さ

石積の高さや勾配を知る具体的資料がないため、番所南側周辺の写真、城外からの写真、鎌倉芳太郎氏の記録等を参考に石積の高さを想定した。

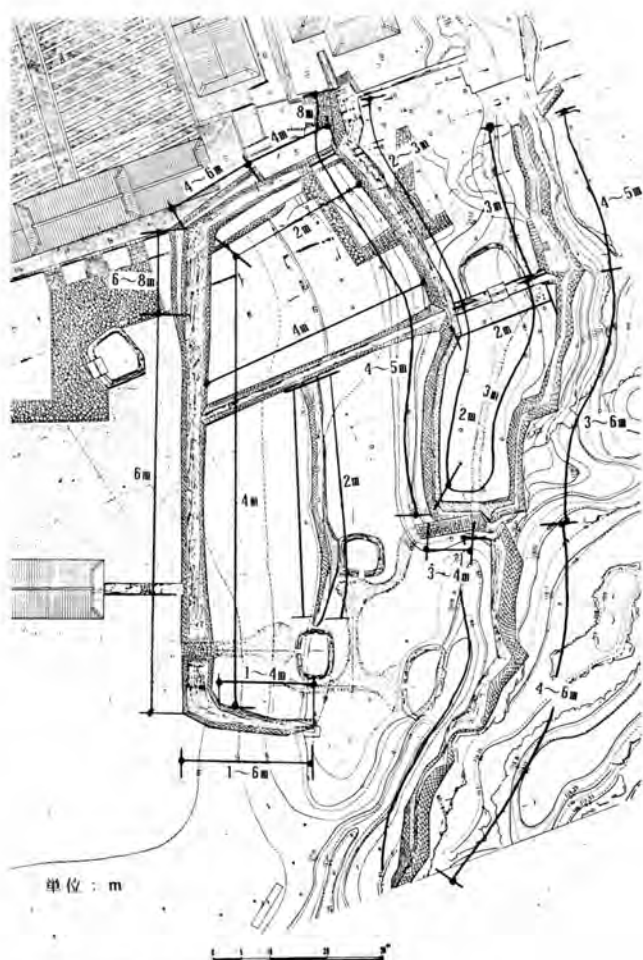


図-2 石積の構成と高さ

5) 御嶽

(1) 御嶽の数と位置

「首里城古絵図」に描かれた5つの石囲いを御嶽と想定する。下之御庭の御嶽は「旧首里城殿舎復原配置図」、その他の御嶽は絵図等より判断して位置を想定した。

(2) 形状

下之御庭の御嶽は『図帳』（沖縄県立芸術大学蔵）を参考に園比屋武御嶽石門と同形式とした。ただし、大きさについては「旧首里城殿舎復原配置図」の平面規模に合わせて園比屋武御嶽石門の70%程度の大きさとした。

京の内内部の4つの御嶽については、現在首里に残る内金城嶽、雨乞嶽、安谷川嶽及び昭和初期に城内にあったとされる御嶽の写真を参考に設定した。



写真-1 京の内の西側にあったとされる御嶽

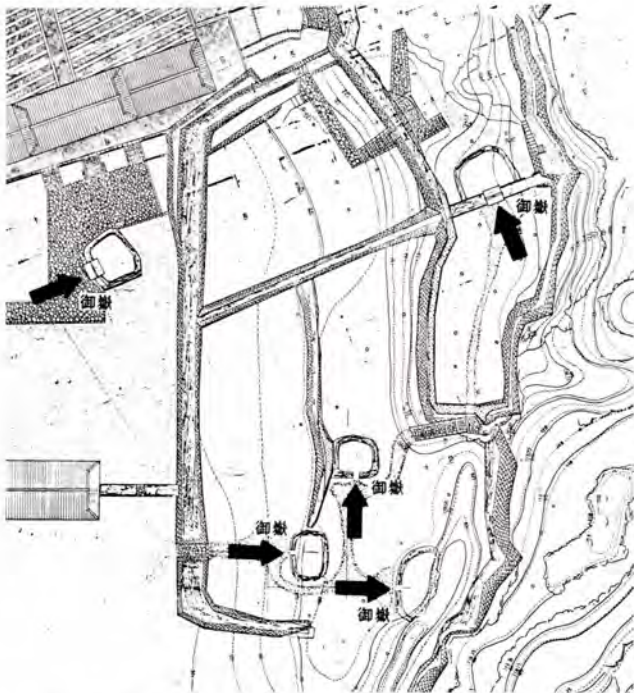


図-1 御嶽の位置

6) 門・道・階段

門は京の内の空間を仕切る石積に取付いており、古絵図から、アーチ門や屋根付き門があったと想定される。規模については両門共、人が通れる大きさの確保が必要と思われる。

道・階段は番所側の門から京の内に入り、アーチ門を抜けて南側の城郭に抜ける石畳、さらに、階段と西側の城郭から南西側最上部に昇る階段、及び物見に昇る階段が史料等から読み取れる。

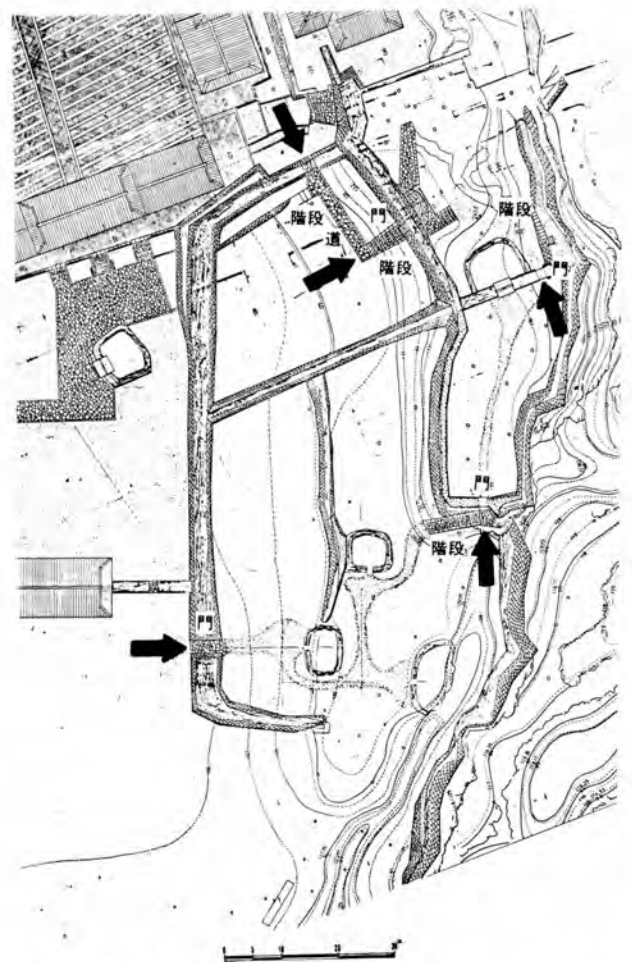


図-2 門・道・階段の位置

7) 建築物

「首里古地図」、及び「首里城古絵図」に建築物が描かれている。これらが拜殿、もしくは祠なのかは不明である。



図-1 「首里城古絵図」の建築物

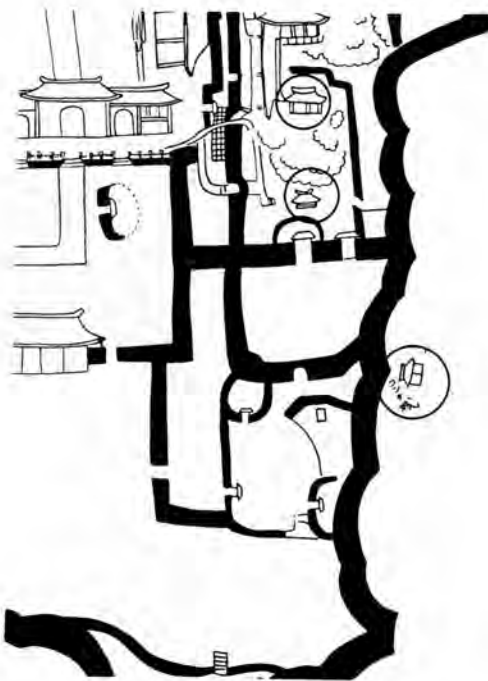


図-2 「首里古地図」の建築物

8) 植生

御嶽の植生は、一般的に大きな森を持ち、その中に拜所が設置されている場合が多い。これは拜所周辺の林分が神域として保護され、その土地の自然が集積された形で残されたことによる。

京内の植生は、神木となるビロウ、クロツグ等を含めた石灰岩自然植生が主であったと思われる。ただし、西側区域の一部が龍潭の土で造成されていたとすると酸性土壌を好むヤマモモ、イジュ等の植生があったとも考えられる。

植生の分布は、「旧首里城図」と「首里城古絵図」をベースに配植した。京内の場合、一般の御嶽と異なって城として機能していることから、防衛的意味での植生の管理、また祭祀空間としての広場を確保する必要から、非常によく植生が管理されていたとも考えられる。

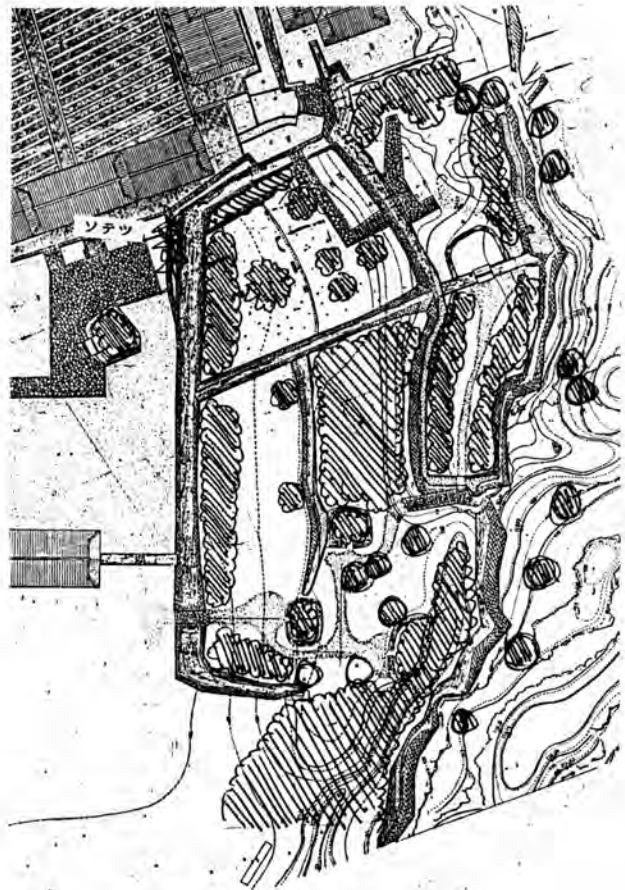


図-3 植生の分布状況図

◎模型写真

